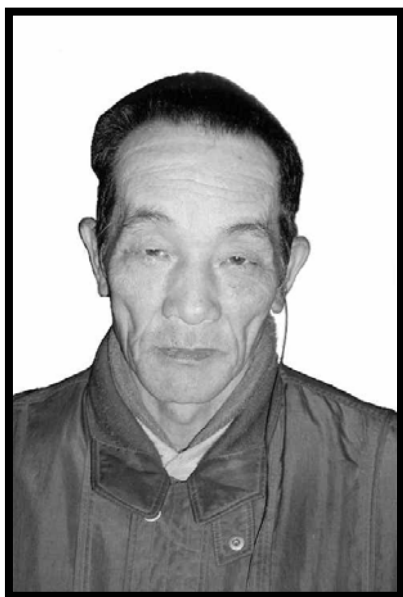


泉大津市立病院の安易な選択が 仲間の死をより苦痛に満ちたものとした

3月7日、地域外(府)で就労していた谷口さんが、11日午後11時20分、杏林病院で亡くなった。

谷口さんは、登録の時、本籍地を明記していたので、10歳年上のお姉さんと連絡が取れた。勝治さんが5歳の時、両親が亡くなり、4人兄弟は離散を余儀なくされ、勝治さんは施設で育てられたという。その後56年間、顔を合わせたことがないので、お姉さんは顔による本人確認ができなかったようだ。よって、「自称、谷口勝治」という扱いになるようだ。「谷口勝治」さんは、死してもその存在を否定される。



故・谷口勝治さん(61歳)

谷口勝治さんは、死の直前にも、その存在を否定されている。泉大津市立病院によって。

谷口さんは、大津川河川敷の除草作業に参加していたが、昼食前にへたり込んで動けなくなっているのをスタッフが見つke、背負って車まで運んだが、しがみつく力もなく、後ろから別のスタッフが支えながら運んだ。

救急車を頼み、病院に搬送される間、救急隊員が脈拍・血圧・体温を測ったが、体温は40度2分もあったようだ。(普通、37度を超えると発熱とされる。体温が42度を超えると、人は死んでしまう。人の身体を構成しているタンパク質が、卵焼きの白身のように熱で凝固・固まってしまうからだ。)

泉大津市立病院に運ばれ、点滴と検査。

2時15分、処置室に入り医者から病状を聞く。「レントゲンを撮ると、大きな影がある。結核を患っていたと言うことだが、完治した影なのか進行中の影なのか判断できない。血糖値も高く、肝機能は極度に低下している……」「ついては、すぐにでも精密検査が必要です。体が弱っているので、以前のカルテが必要です。ですから、この人のかかりつけの医者のところへ遅くとも今日中に連れて行ってください。」「そんな、かかりつけの医者なんかいません。」「入院していた病院でいいです。」「それも分かりません。ここではダメなんです

か。」「以前のカルテが必要なんです。車ですね、どんな車ですか。」「表に止めています。」「医者と二人で表へでる。」「あのトラックですか。横にはなれないなあ。まあ、隣に座らせて大阪に着くまでに急変したら、途中の病院に駆け込んでください。」「そんなに病状が悪いのなら救急車搬送してください。」「搬送先・受け入れてくれる病院も決まっていないのに、救急車要請はできない。」「(スタッフからの報告による)

泉大津市立病院は、「市民の健康を守る総合病院として、新しい医療技術と設備をもって、地域の診療所などとの連携をはかりながら、病気の早期発見と治療にあたっています。」と公言し、「基本理念」として、「1 良質の医療を提供し、信頼され安心感を与える医療を実践します。/ 2 地域の中核病院として、地域全体の医療・福祉の向上に寄与します。/ 3 常に向上心を持ち、協調の精神でチーム医療をおこないます。」を公表しています。

内科は24時間救急としながら、『地域の中核病院として、市民のみなさんが安心して暮らせる「まちづくり」の一環として、深夜や早朝など、地域の診療所などが開院していない時間帯に救急患者に限り、診療を実施しています。』としています。

泉大津市立病院は慈悲心を持たず差別した。

このような立派な病院が、入院はおろか、転送先を探す努力もしてくれなかったのはなぜなのでしょう。

午後5時前、事務所に着いた谷口さんは、再度救急車で、杏林病院に。午後7時半頃には、酸素マスクを付けられて重篤の状態となっていました。その後、集中治療室に移され、耳からも出血している様子が見受けられました。

お姉さんは、杏林病院で死亡の直接の原因を、「肝臓からの出血、輸血はしなかった」と聞いたそうです。

悪くなった肝臓は様々な障害を引き起こします。肝臓で作られる胆汁が腸に流れず血液中に入り、黄疸や痒みを起こします。また、肝臓に流れ込む血液が肝臓の中を通過しにくくなるため、近くの細い血管を通過して心臓へ戻ろうとする(側副血行路と言います)ために、食道静脈瘤や脾臓肥大、腹水が貯まったりします。食道静脈瘤が破裂すると、耳から出血することもあるそうです。

3月7日の段階で、谷口さんの肝臓はもう手の施しようもない状態であったかも知れません。死は避けられないものであったのかも知れません。

そうであったとして、なぜ、肝機能の極度の低下を把握した病院が放り出したりしたのでしょうか。死に面した谷口さんに対して、せめて死に至る過程をなるべく苦痛を少なくするという努力をしなかったのでしょうか。

泉大津市立病院のY課長は、最後まで「行路」で扱うことを拒んだそうです。

谷口さんは、死に面してなお、お金持ちでなかったことで、肉体的に、精神的に苦痛を味わわされたということが出来ます。

泉大津から大阪までの道中、谷口さんはどれほど苦しく、悔しかったことでしょう。

病院は、身内としか話しはしないという。天涯孤独のものは、やられ損か！

谷口さんは、3月7日、仕事前にアンケートを記入している。平成11年10月からテント生活を始め、両足がむくんだことから、平成12年医療センターにかかっている。しかし、精密検査が予定されていながら、本人が受診を中断したため、おこなわれなかった。平成13年に結核検診を受けているが、治療を要しない古いものであった。登録は、前は未登録。前々回は登録していた。NPO釜ヶ崎は、輪番労働者の健康管理を強

めたいと考えている。